

令和2年度 奈良市立都祁こども園 研究実践概要

園長名 井上 邦子
全園児数 121名

1. 研究主題 「心豊かで 生き生きと生活する子どもの育成をめざして」
～ “わくわくドキドキ もっとやってみよう”
遊び込む子どもの姿を通して～

2. 研究年度 3年度

3. 研究主題設定理由

遊びや生活を通して、心豊かで、生き生きと生活する子どもの育成をめざしている。心を動かして遊ぶ姿や環境のあり方について研究し、子ども理解の視点や環境構成の工夫、発達に応じた必要な援助の仕方について探ってきた。そして、「やってみたい」「おもしろそう」「もっとしてみよう」と子ども自らがわくわくと心を動かし、遊び込めるような環境構成の工夫や保育者の援助について更に追及したいと思い研究主題に設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・わくわくしながら夢中になって〈もの〉〈ひと〉〈こと〉に関わって遊び込む子どもの姿に着目し、子ども理解と保育者の援助、環境構成の大切さについて明らかにしていく。

②研究の重点

- ・乳幼児の発達に応じた保育内容を工夫し、〈もの〉〈ひと〉〈こと〉と関わって遊び込むための環境を工夫し、わくわくドキドキと心が動く瞬間を捉え、一人一人に合った援助のあり方について考える。

③活動の方法

~~~~~子どもの心が動く瞬間~~~~~ 保育者の援助や環境構成

### 【0歳児】10月 にぎにぎ A児(9ヵ月)の姿から

A児(9ヵ月)とB児(8ヵ月)は、散歩車に乗せてもらい園庭を散策している。つかまり立ちで周りの景色や、他のクラスの子も遊んでいる様子を見ている。保育者がA児、B児のしているものに「葉っぱだね、みんな遊んでいるね、気持ちいいね」など声をかけながら散歩車を押す。散歩車をコスモスの花の前に止めるとA児が目の前のコスモスに目をとめ手を伸ばして触ろうとする。「コスモスだね、きれいだね」と保育者がコスモスに触れる。B児の手がコスモスに届き、花を引っ張ってちぎる。花びらをつかんだ手をにぎりしめたり開いたりしながら、花びらがなくなった手のひらを見ている。「にぎにぎしたらコスモスなくなったね」とA児の仕草を言葉にすると保育者と視線を合わせ、また手を伸ばし花びらをちぎっては、「にぎにぎ」をし、花びらがなくなった手のひらを見ている。



#### <評価>

- ・身近な人と気持ちが通じ合う安心した関係の中で、戸外で過ごすことを心地よく感じている。散歩車に乗り周りの風景に刺激されながら興味のあるもの(コスモス)に触れることができた。興味のあるものに触れることで周りへの関心も広がってきている。手か

らなくなる花びらをA児はどんな風を感じただろう。興味のあるものに出会っている時の子どもの姿を見逃さず、子どもと共に感じる心を大切にしていきたい。

### 【1歳児】10月 かばさんや A児（2歳5ヵ月）の姿から

A児は、砂場で保育者と一緒にスコップで山をつくったり、容器に砂を入れたり出したりを楽しんでいる。近くにあった型ぬきを見つけ保育者に「はい」と渡した。保育者が「かばさんの型やね」と声をかけるとA児は「かばさんや」「おーいおーいかばくんかたそうでやわらかそうで」と歌い出した。保育者もA児に合わせて「おーいおーいかばくん」と一緒に口ずさむと嬉しそうな表情を見せかばの型に砂を入れた。また、「おーいおーいかばくんかたそうでやわらかそうで」と歌いながら体を揺らし砂を入れることを楽しんでいた。「A君お砂いっぱいになったね」と声をかけるとA児も「いっぱいいっぱい」と言って何度も何度も繰り返し嬉しように砂をいっぱい入れていた。



#### <評価>

- ・砂場にあった型ぬきに興味を示し、保育者の「かばくんやね」の声かけで日ごろから親しんでいる絵本「おーいかばくん」にイメージが繋がった。保育者と砂を触ったりスコップで型ぬきに入れたり出したりを楽しむ中で、繰り返すことのおもしろさを感じる姿が見られた。やってみたい気持ちや姿を大事にし、楽しもうとする姿を見守りながら関わっていきたい。

### 【2歳児】6月 パシャパシャ A児（3歳0か月）B児（2歳4か月）の姿から

園庭の水遊びコーナーに、たくさんのバケツやタライに水を溜めて置いておいた。A児が1つのバケツの水をパシャーとひっくり返した。すぐ側でバケツの水を覗いて見ていたB児が興味をもち、真似て他のバケツの水をひっくり返す。A児が「お水、いっぱいやなあ。」と言うと、B児も「お水いっぱいやなあ。」と真似て話し、また近くのバケツの水をひっくり返して喜ぶ。保育者が「お水無くなっちゃったね。ゾウさんホースどこだ。」と伝えると、A児は周りを見渡し、バケツを持って水を汲みに行った。B児もバケツをもってそのすぐ後を追いかけた。A児が「重たい！重たい！」と運ぶと、B児も「重たい！重たい！」と運ぶ。そして戻ってくると、またバケツをひっくり返し、足元が水浸しになった。A児は水浸しの足元をじっと見て、足を動かしてみる。足元の水は、パシャパシャと音をたてて跳ねる。隣にいたB児はその様子にニコッと笑い、真似て足を動かした。さらにA児の足踏みが勢いよくなり、いっそう水がパシャパシャと跳ねる。B児は、「アハハ」と笑いながら口に手を当てて喜び、また真似て足高く足踏みをする。保育者も一緒に、「お水、パシャパシャ」と小さく足を動かしてみる。A児が「お水パシャパシャ」と保育者の言葉を真似て言うと、B児もまた「お水パシャパシャ」と言って足を動かす。そのうちにC児、D児も加わり、「お水パシャパシャ」と言いながら、ただただ足踏みを繰り返し水が飛び跳ねるのを見て、友達と一緒に高い声をあげていた。



#### <評価>

- ・友達がしていることが少しずつ目に入り、興味をもったことを真似てしてみようとする姿が見られるようになってきた。A児がしていることや話したことをB児は真似て楽しんでいる。足元にできた大きな水たまりや、たまたま起こった水が飛び跳ねる事象に興味をもって見たり、「パシャパシャ」と楽しいと感じたことをひたすら繰り返したりして遊ぶこの時期の姿が見られた。真似て繰り返すことを楽しんでいる子どもの思いを保育者が受け止めて一緒に遊ぶことで、周りの友達への刺激となり遊びが広がった。子どもが興味をもってやってみようとする姿や思いを受容し、環境を整えたり保育者が関わったりすることの大切さを感じた。

### 【3歳児】10月 ドングリいっぱいのおうち

ベニヤ板の傾斜で、ドングリやカラーボール、ピン球などを転がしているA、B、C児。ベニヤ板の先に置いた金タライに、ドングリが勢よく転がり落ちる様子や音に興味を持って喜んで見ている。転がったドングリが金タライの中に溜まってくると、A児「ここに入れよう」とバケツを持って来て、金タライの中に入り、ドングリを上から落としたりバケツの中につかみ入れたりする。B、C児は繰り返しドングリを傾斜の上から転がしている。A児「見て、ドングリのケーキ」と、バケツいっぱいのドングリを保育者に見せる。保育者は「本当やね、ドングリのおうちでつくったケーキやね」と、A児の思いを受け止める。様子を見ていたB児が「ドングリのおうちもつとつくりたい」と、言う。「いいね、おもしろそうやね」と、保育者が共感すると、C児「おうちは食べる所あるねん」と、伝える。「やってみる？」と、保育者が言うと、「つくるつくる」「ドングリのおうちやな」と、一緒に机や椅子を運んだり、段ボールの囲いを周りに置いたりする。「やったー、できた」「ドングリいっぱいのおうちや」と、急いでおうちの中に入って遊び始める。B児「ここは温泉」と、おうちから温泉に変わった金タライの中に入り、たくさんのドングリの中に手を入れて感触を楽しんだり転がってくるドングリを受け止めたりしている。A児「これはジュースとケーキ」と、ドングリを入れたコップとバケツを机に運ぶ。C児や集まってきた子ども達も椅子に座って「ここ、なんかいいとこやな」「ドングリのおうちでまた休憩しよう」と、嬉しそうに話している。その後も、ドングリのおうちの中で友達と一緒にごっこ遊びを楽しんでいた。



#### <評価>

- いろいろな素材を使って転がし遊びを楽しみ、バケツにいっぱいになったドングリに親しみをもった。子ども一人一人のイメージは違い、「ドングリのケーキ」「ドングリのおうち」と言ってドングリを様々に見立て、「ここ、なんかいいとこやな」と、ドングリのおうちは居心地が良いところとなった。また、ごちそうづくりや温泉ごっこなど、自分達の経験したことや見たことを遊びに取り入れる姿が増えてきた。「ドングリのおうちつくりたい」という子どもの思いを見逃さず、無理につなげようとせず自然な関わりの中で保育者が一人一人の気持ちやイメージをそのまま受け止めたり、提案したり、きっかけづくりをしたことで、安心して自分の思いを出して遊ぶ姿が見られた。また、おうちのイメージが広がるような声掛けや環境づくりが、友達とごっこ遊びを楽しむ姿に繋がった。

### 【4歳児】10月 大きい組さんみたいにやってみよう!

運動遊び参観に向けてかけっこやダンスを楽しんでいた。5歳児のフラッグや鼓隊の様子にも興味をもち、取り組みの様子をテラスから見たいとの子どもの声が聞かれたため、5歳児の様子を何度も繰り返し見学した。

運動遊び参観が終わり、運動遊び参観でしていたダンスをして遊んでいたA児と周りの幼児達。A児が「大きい組さんがやったフラッグをやってみよう」と保育者に伝え、近くにいたB児とC児も「一緒にやりたい」との声が聞かれ、保育者が「5歳さんにCDかりに行こうか」と提案する。5歳児の部屋に行き、A児とB児とC児と一緒に考えた言葉の「フラッグのCDかしてください」と近くにいた5歳児に伝えた。「いいよ」と5歳児が言ってくれ、CDをかりるととても嬉しそうな表情で戻ってきた。5歳児にかりたCDを鳴らすと、保育者がつくった手づくりのフラッグをもち、思い思いに並んで振り出した。5歳児の取り組みの様子を何度も見ていたので、動きを合わせながら伸び伸びと表現していた。しかし、曲の途中の隊形移動では、色ごとに並ぶところが上手くいかない。A児はフラッグを振りながら「色ごとに並んで」と周りの幼児に伝える。周りの幼児は自分達なりに音楽に合わせて表現することを楽しんでいて、A児の思いが伝わらない。A児は思いが上手く伝わらなかったが、一曲終わるまでフラッグを振り続けた。A児の表情を読み取り、納得していない様子だったためA児に思いを聞き、周りの幼児に伝える場をつくった。A児「ねえ聞いて、大きい組さんみたいに色ごとにかっこよく並びたいねん」。B児は「そうや、色ごとに並んでた」。C児「次は色ごとに並んでやってみよう」とA児の思いをみんなで受け止め、何度も音楽を鳴らしながらみんな色ごとに並んで表現することを楽しんでいった。



### <評価>

- ・5歳児がみんなで頑張っていて取り組んでいるフラッグや鼓隊の様子をテラスから何度も見学し、いつも「5歳さんすごいな」「5歳さんめっちゃかっこいい」と憧れの気持ちをもっていた。遊びの中で5歳児がしていたフラッグを自分達もやってみようという思いをもち、CDをかりにいき、見よう見まねで表現する姿があった。5歳児のようにかっこよく表現したいというA児の思いをみんなで共有する場をつくり意思疎通することで、「5歳さんのように」という共通の具体的な楽しみを見つけた。遊びの中で友達との関わりも少しずつ増え、共有することができつつある。やりたい思いを受け止め、子どもの様子を見守る援助が友達に思いを伝え、より楽しむ姿に繋がった。

### 【5歳児】10月 ドングリ渋滞の解決方法

1学期からトイを使った転がし遊びが継続している。A、B、C児はトイを組み替えたり繋げたりして遊ぶことを楽しみに登園し、「今日はどんなコースにしよう」と話をしながら戸外へ走って行く。長いコースでドングリを転がそうと思い、コースを何度もつくり変え、試行錯誤しながら最終地点までドングリが転がっていくコースをつくろうとしている。しかし、長くすればするほど傾斜が緩くなり、うまく転がらない。A児が「うまくいかへんな」と言うとB児が「もう全然転がらへん。ドングリの渋滞ばかり」と言う。C児「なんで転がりにくいんやろう」と3人で悩み、トイを何度も組み替え試している。保育者は様子を見守り、室内での転がし遊びを思い出して何かヒントになればいいと思い、「なんでやろう」と疑問を投げかけた。「廊下でしていた転がし遊びみたいにしたらどう」と提案した。するとA児は「廊下でしていた大きな玉(けん玉の玉)は重くて転がるけど、ドングリは軽すぎるねん。だから廊下みたいにするのは難しい」と言う。保育者は重さの違いに気付いたA児の考えに「すごい発見やね。じゃあうまく転がる方法を考えてみよう」と共感し、もう一度考えを出し合っただけでコースづくりができるように声を掛ける。3人で相談した後、水の勢いを利用してペットボトルに水を入れて持ってきたり、砂場で川づくりをしている友達に「ドングリ転がしと繋げてもいい」と聞いたりする。そして、砂場までトイを長く繋げ、ドングリと一緒に水を流そうとやってみる。その様子を見て保育者が「すごいね。なんで水流したの」と問い掛ける。A児は「ドングリを水と一緒に転がしたらうまくいくかもって思いついてん」と言う。B、C児は「A君が考えて水が流れたら、水溜まりになるから砂場の川と繋げたらいいなって思って、砂場の友達に聞いてん」と得意気に話す。A児は「うまく流れた。これでドングリの渋滞がなくなったわ。僕たちが考えてん」と周りの友達にも知らせる。その後もA、B、C児は遊びの面白さを感じ、「いいこと考えた」と試したり工夫したりして遊ぶ姿が見られた。



### <評価>

- ・長く繋げたトイのコースにドングリがうまく転がらないことから、子ども達が試行錯誤して解決方法を考える機会に繋がった。遊びの中で自分の考えを友達に伝えたり友達の考えを認めたりしながら、一緒に遊びを進めていこうとする姿が見られた。転がすものの重さによって、転がり方の違いに気付いたり、砂場の川づくりの遊びと繋げようとしていたりしながら、「いいこと考えた」と意欲的に遊ぶ姿に繋がった。自分達で考えを膨らませたり工夫したことを周りの友達に教え合ったりして遊びを発展させる姿が増えてきた。

## 5. 研究の成果

- 乳児においては、保育者との愛着関係の中で毎日の安定的な生活の繰り返しを積み重ねていくことで、見通しをもって生活できるようになる。子どもが興味のあるものに出会える環境や自ら関わっていく環境を保育者が整え、保育者も一緒に楽しみながら言葉にならない乳児期のわくわくドキドキに保育者が気付き、認め共に喜ぶことの大切さを学んだ。
- 幼児はそれぞれの年齢や発達に応じてわくわくドキドキする瞬間は様々である。〈もの〉〈ひと〉〈こと〉に主体的に関わることで心を動かし遊び込む姿が見られた。子どものしていることに保育者もわくわくドキドキし、その瞬間に合った声掛けや援助、環境構成の工夫が、子ども自ら考えたり繰り返し試したり「もっとやってみよう」という姿に繋がった。

## 6. 今後の課題

- 空間や環境構成の工夫と保育者の援助など、それぞれの年齢で追及してきたことを実践し、保育者間で共有し、保育内容の充実を図り、〈もの〉〈ひと〉〈こと〉に関わって遊び込む子どもの姿を理解し、保育者自身も心を動かしながら今後も“心豊かで生き生きと生活する子どもの育成”に努めていきたい。